Script　Samurai Counseling

Pilot – “Outflow determines Inflow”

ケース No. 4 : “姉弟の争い”

Cast List

登場人物:レギュラー

Madam Maya （F.カウンセラー）

Satoru (マダムの弟子／ボディーガード／付き人）

David(弁護士）

Robert Sebastian (執事）

第四話登場人物

ジョナサン・ラッセル　心理カウンセラー（デービッドの友人）（準レギュラー）

テッド・ボーデン　60 歳。実業家。

スーザン・ボーデン　63 歳　テッドの姉

弁護士A

刑事

ACT ONE

INT.雑然とした殺風景な家。テッドの自宅。

弁護士Aからの書状を読むテッド。

「お父上の遺言状の写しをお送りします。ご査収ください。貴殿の所在地の特定に手間がかかり、連絡が遅くなったことをお詫びします」

テッド、焦りながら開き、読み、驚く。

テッド

ま、まさかこんなことが…。

顔に怒りがめらめらと現れ、恐ろしい憎しみの目に変わる。

END OF ACT ONE

ACT TWO

INT. 普通の住宅。リビング。父親、母親の写真が飾ってある。スーザンがソファに座って、老眼鏡をかけてカタログを眺めている。買い物が楽しい雰囲気。まだかなり明るい6時ごろ。

刑事がチャイムを鳴らす。スーザン、老眼鏡をはずして、玄関を開ける。

刑事
スーザン・ボーデンさんですね？

スーザン
はい。そうですが…。なにか？（怪訝そうに）

刑事
テッド・ボーデン氏をご存知ですね？

スーザン
え？　テッド…。ええ、弟です。それがなにか？
（急にハッとして）
あの子が何かをしでかしたのでしょうか？！

刑事
いや、まだしでかしていませんよ。でも、これからしでかすところのようですので、念のために私たちが動いています。

スーザン
ええ？　どういうことかしら…？

刑事
ドクター・ジョナサン・ラッセルは、あなたの弟テッドの心理カウンセラーです。今日の午後4時、彼のところに来たテッド氏は、これからあなたを殺しに行く、と言ったそうです。カリフォルニア州条約43.92 項(California Civil Code 43.92)により、ラッセル博士は被害者になる可能性のあるあなたに連

絡する必要を感じ、警察に通報をしてきました。
それで、あなたに警告をしに来た、というわけです。

スーザン
ええ～！！？
それは本当なの？！
（おろおろして、パニックになる）
わ、私、殺されるの？　テッドに？　そ、そんなこと…

刑事
いや、彼が本当にここに来るかはまだわかりませんよ。それに、彼が来てもなにも起こらないように、私たちが来たのですから。

スーザン
なんてことなの？　なんてこと…。
（頭がパニックになって、おろおろするばかり）

刑事
警察は今、彼を探しています。見つけ次第、彼を拘束します。WIC セクション 5150 条により、(Welfare and Institute Code Section 5150)警察は彼を72時間拘束できます。その間に頭を冷やしてくれればいいですが、もし、まだ危険性がある場合、さらに期間を延長して拘束することが可能です。
ですから、すぐに危険があるわけではありませんが、外出は極力避け、戸締りをしっかりしてください。外出するときは、一人ではなく、誰かについてきてもらっていてください。

スーザン
で、でも…。私は一人暮らしだわ。父も母も亡くなって…。そう、父が亡くなったばかりだというのに…。こんな…。弟に殺されるかもしれないなんて…。
（スーザン、うつむいて泣き始める）

刑事
お気の毒です。警察としても、できる限りのことをしますので、ご協力をお願いします。
危険を感じたら、すぐに通報をお願いします。
（連絡先のメモを渡す）

警察、帰る。スーザン、とまどいながら、もらったメモをバッグの中にとりあえずしまう。
部屋に戻って、あちこちの戸締りを確認する。
そして、不安そうに二階の窓から外をうかがう。そして、手で顔をおおって、苦悩する様子。

END OF ACT TWO

ACT THREE

INT. スーザンの自宅。寝室。 ＋ 回想シーン（同じ家の 60 年近く前のこと）

夜、眠れない様子のスーザン。
子どものころの思い出が脳裏を駆け巡る。

（回想・スーザン5歳。テッド2歳）
幼児スーザンはお人形さんで遊んでいる。とてもかわいがる。それを見ていた幼児テッド、スーザンが人形をおいて席を立った隙に、人形で遊び始める。戻ってきたスーザン、テッドから人形を取り上げる。

幼児スーザン
テッドったら！ これはあたしのよ！ 触らないでよ！

幼児テッド、わーんと泣き出す。激しい声で泣き、母親のところまで走り、足にしがみつき、スーザンを振り返る。

母親
スーザン、また泣かせて！ テッド、あなたもいちいち泣くのはやめてちょうだい。（大きなため息）

幼児スーザン
だって！ テッドがあたしの大事なお人形を触ったのよ！

母親
いいじゃない。触ったくらい。貸してあげればいいでしょう？

幼児スーザン
いやよ。テッドは人形をくちゃくちゃにするのよ。

母親
お母さんがいつもきれにい直してあげているでしょう？

スーザン、不満げな顔。

（別のシーン）
幼児スーザンが積み木で城を作っている。とても楽しそう。そこへ幼児テッドが来て、笑いながら、がしゃんと崩す。そしてまた笑う。

幼児スーザン
テッド、なにするのよ！　私がせっかくつくったのに！

幼児スーザン、幼児テッドをパシンと叩く。火が付いたようになくテッド。そして、また母親の足にしがみつきに行く。
母親、ナイフを持っていたので、あやうく指を切りそうになる。
料理が中断され、不機嫌に。

母親
スーザンったら！　またテッドを泣かせて！

幼児スーザン
だって！！

母親
だってじゃないわよ。お母さんは忙しいのよ。テッドをいちいち泣かせると、私はお料理ができないわ。あなたはお姉ちゃんなんだから、もう少しテッドの世話をしてちょうだいよ。

幼児スーザン
いやだ！　テッドなんか大嫌い。こんな子、いなきゃいいのに！

母親
スーザン、なんてことを言うの？！

スーザン
もういやだ～！　お母さんなんか嫌いだ～。（泣きはじめる）

すると、その様子を見て、今のうち、とばかり、テッドがスーザンの人形をもって、遊び始める。
それに気づかず、泣き続けるスーザン。そして、そのまま寝室に行き、ベッドでしばらく泣いている。

（そのしばらく後のシーン）
しばらくして、おもちゃを見に行くと…。

幼児スーザン
ひ、ひどい…。

人形がばらばらにされて、髪の毛がぐしゃぐしゃ。まるで残虐な事件の後のよう。
母親は料理の途中で、幼児テッドをかわいがっている最中で、幼児テッドはキャッキャッと笑っている。
それを憎しみの目で見る幼児スーザン。

（現在に戻る）
ばらばらにされた人形が、現在の自分の寝ている姿に重なる。
それが未来のように思われて、うなされているスーザン

END OF ACT THREE

ACT FOUR

次の日、スーザンは冷蔵庫を開ける。もう食べ物が残り少ない。ミルクがもうカラ。卵もない。
買い物に行かなければと思っている様子。
スーザン、窓から外をうかがっている。何度かそうしたあと、勇気を出して、車で出かけようとする。
車に乗って、少し走り出すと、自分の車の後に、一台の車がつけてくる。
テッドだ！　殺される！という恐怖にかられ、スーザンはパニックに。
めちゃくちゃな運転になり、反対側の車に怒鳴られる。角を曲がり、後ろの車が見えなくなったところで車を止め、ハアハアとあえぐ。

スーザン
（一人でつぶやく）な、なんでこんな…。
（ハンドルにしがみつき、涙をにじませる）

思い出したように、バッグの中から、きのう警察がおいていったメモを見る。
そこには、警察の担当刑事の番号と、ラッセル博士の番号があった。

END OF ACT FOUR

ACT FIVE

INT. デービッドの弁護士事務所。弁護士事務所らしくない和風のインテリア。デービッドとスーザンが差し向かいに置かれたカウチに座っている。

Susan

（びくびくしている。おびえている様子）

…というわけで、ラッセル博士が、とりあえずあなたのところに行けと。なんとかしてくれるからって。すみません。突然おしかけてしまって…。私も不安で不安で、一人で家にいることができなくて…。ああ、どうしたらいいんでしょう？　私は一人暮らしで、守ってくれる家族もいません。弟に殺されでもしたら…。警察が彼をみつければ、彼を拘束できるということなんですが、警察が彼を見つける前に、私が彼に殺されたらどうしましょう？

私はなにも悪いことなんかしていないのに…。やっと、落ち着いて暮らせると思ったのに…。

デービッド

なるほど。緊急事態なんですな。ジョナサン・ラッセル博士のことはよく知っています。あなたの弟さんを二年間診てきたと言っていましたよ。彼とは長い付き合いですが、こんなことはめったにありません。彼に頼まれたのですから、私がなんとかお手伝いしましょう。安心してください。

Susan

ありがとうございます。…弟は昔から銃を持っているんですよ。ここを出る時に、もしかすると遠くの陰で私を狙っているかもしれません。ああ、どうしたらいいのか…。

（おろおろしている）

デービッド

で、いったいあなたは彼になにをしたんですか？

Susan

私は彼になにもしていませんよ！！　もう、長い間彼に会ったこともないんです。

でも、彼は、幸せを壊したのは全部私のせいと、思い込んでいるんです。

デービッド

で、何がきっかけで彼はあなたを殺そうと考えたのですか？　詳しくお話ください。

Susan

え、ええ…。私と弟はもう 30 年以上も会っていません。弟は 20 歳のときに家を出て、最初はときどき顔を見せていましたが、30歳くらいのころだったか、私や親にわけのわからない状態で、ひどく怒って、ついに絶縁状態になっていました。6年前の母の葬儀にも、弟は来ませんでしたしね。母が亡くなった時は、母の遺産はほとんどありませんし、わずかなものを父が受け継ぎましたから、そんなに問題はありませんでした。実は 3 か月ほど前、父がなくなりました。そして、父の葬儀のときも弟は顔を出しませんでした。父が危篤の時にも連絡をしたのですが、弟の連絡先がわからなくなっていたんです。父は遺言状を作成していました。それを見ると、実は…（申し訳なさそうに）遺産は全部、私に譲る、と書いてあったんです。父にしてみたら、母親の葬儀にも出てこない息子は、もう家族ではないと考えたのでしょう。しかし、どうやら、弟のカウンセラーの、ええと、ラッセル博士の話では、弟はそれを読んで激怒したらしく、私を殺さなければ気が済まないと言ったそうです。それで、ドクターは警察に連絡し、私にも警察を通して連絡をくれたんです。私はもう、怖くて怖くて…。あんなの、弟なんかじゃありません。昔から弟は乱暴で意地が悪くて…。

デービッド

なるほど。…弟さんが親と縁を切ったそもそもの原因は何なのですか？

スーザン

それが、よくわからないんです。とにかく、自分の不幸、自分の不運はすべて誰かのせいだと思っていて、いつも私を攻撃していました。弟は若いころから一人で事業をしているのですが、大変なことがいろいろあるのだと思います。そういう苦労を全部、親のせいにしていて、その元の原因が私だと思い込んでいます。私に言わせれば、性格が意地悪すぎて、まわりとうまくいかないから苦労しているのだと思います。

デービッド

ふむふむ。わかりましたよ。兄弟間のこういうことは、よくあることですからね。

スーザン

えっ、よくあることなんですか？

デービッド

そうです。よくあります。出来事が大きいか、小さいかの違いですね。どこの家族でも、遺産相続になるともめ始める、ということがあるでしょう？

スーザン

でも…殺す、殺されるなんて状態になる人なんて、そうはいないでしょ？

本当にもう私は 63 になるのに、まだこんなトラブルを抱えて生きるなんて…。

デービッド

とりあえず、あなたは保護されるべきですよね。警察はあなたの弟を保護観察（Hold）するつもりで探しているのですから、あなたのまわりに警官が張り付いているでしょう。

スーザン

え、どこにかしら…？

（窓の外を覗こうとするが、それも怖いので、やめておく）

（デービッド、建物に取り付けられたカメラの映像をパソコン上で見ながら、外部の様子をうかがっている。男が確かに、一人こちらを見ているが、弟なのか刑事なのかはわからない）

デービッド

弟さんが本当にあなたを殺しに来るかどうかはわかりませんから、そんなにおびえないでください。

あなたの車をつけていたのは、弟さんではなく、刑事かもしれませんよ。

ここでいつまでもこもっているわけにもいきません。とりあえず、あなたを助けてくれる人のところにお連れしましょう。こんなときには、とても頼りになる人ですよ。

スーザン

助けてくれる？　保護してもらえるということですか？

デービッド

いえ、あなたのカウンセリングをし、あなたの問題を根本から解決してくれる人です。一時的に保護されるよりも、よほど役に立ちますよ。

スーザン

根本的に解決…？

（よくわからない、といった表情）

駐車場はここの地下ですから、私の車で出れば、わからないでしょう。

スーザン、不安そうな顔ですがるようにデービッドを見上げている。

END OF ACT FIVE

ACT SIX

EXT. マダムのベルエアの豪邸

門が開いて、デービッドの車が着く。そして、しっかりと閉まる。デービッドがスーザンの肩を抱きながら、スーザンを家のエントランスまで連れて行く。

執　事
（玄関を開けて）これはこれは、デービッド。お客様を突然お連れするとはめずらしい。どうしましたかな？

デービッド
（中に入りながら）いや、非常時でね。マダムは？

執事
お留守だ。しかし、サトルはいる。

デービッド
じゃ、サトルでいい。彼女を保護してほしいんだ。命を狙われている。

執事
（スーザンを上から下まで見て…）では、こちらへどうぞ。
（執事、スーザンだけを連れて奥に行く。デービッドは勝手知ったる家のように、ブラブラしている）

INT. マダムの洋間

サトルがスーザンの向かいに座って、紙を差し出している。

サトル
ずいぶんとお困りのようですな。特急メソッドで行きましょう。
いいですか。あなたを殺そうしている人の性格の悪い点、悪口を、この紙に全部書いてください。

スーザン

ええ、そんなこと…。私は弟の悪口なんか、言いたくないわ。

サトル

あなたを殺そうとしているんですよ。同情している場合ではありません。きれいごとはやめて、あなたの心中にある罵詈雑言をここに書いてください。いったいどんな奴なんですか？

スーザン

ええと…。（とまどいながら）自分勝手で、何度も都合の悪いことは人のせいにして…。それから、人をすぐに憎むんです。それも尋常じゃないくらいに。そして、もう理屈がわからなくなるんです。執念深くて、蛇のよう。…いやだわ。こんな男が自分の弟だなんて…。これをこの紙に書くんですか？

サトル

そうです。書いてください。

スーザン

（気が進まなそうに少しずつ書く）ええと…。

サトル

そうそう。それから、具体的な出来事もあるでしょう。あのとき、あいつはこう言ったとか、こんなことをした、とかです。

スーザン

ええと…。子どものころ、こんなことがありました。プールサイドで、水遊びをしていたんです。バケツで水をかけあって遊んでいました。そしたら、弟の水がほかの人にかかってしまって…。それを母親に怒られました。そのとき、テッドは、私が悪いって言ったんです。私が水遊びを始めたからって。でも、人に水をかけたのはテッドだから、私じゃない！っていったら、私のことをうそつき、うそつきって言いだして…。それ以来、私をうそつき呼ばわりするんです。

それから、ええと…35年前、親の前から姿を消したとき、彼はこう言ったわ。

「わかったよ！　あんたたちはスーザンがかわいいんだろう！　スーザンさえいればいいんだろう！　俺なんか、生まれてこなきゃよかったと思っているんだろう！」

でも、テッドが私たちを憎んだりしなければ、生まれてこなきゃいいなんて誰も思わないわ。テッドは中学生のころから、家庭内暴力がひどくて、思い通りにならないと、すぐに癇癪を起して、ものを壊したり、母親に乱暴したりしていたんです。そんな子、誰が家にいてほしいかしら？　だから、私のこ

とは関係なく、ただテッドが親に嫌われるようなわがままを言っていただけだわ。それを、私がいるから愛されないって、勝手に思い込んだのよ。

サトル
ふむ。つまり、思い通りにならないと、全部自分が愛されていないからだ、と思い込んで、攻撃するということですね？

スーザン
そうです。（だんだんと思いがこみ上げてきて）
そう…。あの子のせいで、私は本当の意味で幸せになれなかった。両親は悲しむし、私がそばで両親の世話をしても、両親はテッドのことを思っていたわ。「あの子は今頃、どうしているだろう」とか…。もう忘れてしまえばいいのに。いつだって私は、あの子の陰におびえて生きていたわ。また舞い戻ってきて、家で暴れる日が来たらとどうしようって。私は結婚もせず、ずっと両親のそばにいて、世話をしたのよ。その私が遺産を全部もらって、何が悪いの？

サトル
なるほど。それを書いてください。

スーザン
（黙々と書く。涙がこぼれてくる）

サトル
では、次の作業をしましょう。
こちら来てください。
（サトル、立ち上がり、スーザンを招く）

スーザンとサトル、地下の道場へ。
広い畳の道場。真ん中に人型の大きな藁人形がある。サトルは竹刀を二本取り、その前に立つ。スーザン、その隣に立つ。

サトル
（竹刀を一本スーザンに渡して）
いいですか。こうやってください。私が見本を見せます。
（竹刀で藁人形を叩きながら）よくも自分のわがままを人にぶつけたな～！！
よくも家族を攻撃したな～！！　よくも私の人生を台無しにしたな～。そんなお前は生きる意味がない。ここで死ね～！！

スーザン

ええ～？　そんな恐ろしいこと、言えないわ。バチが当たるわ。

サトル

罪を憎んで人を憎まずというでしょう。弟さんがもし、自分の間違いを悔いてやさしい人になれば、あなたはもう怖くないし、彼と仲良くできるでしょう。ここで殺しているのは、弟さんではなく、「人に自分のわがままをぶつける、攻撃的な人間性」なんです。それを殺してしまえば、弟さんはよくなります。だから、遠慮なくやってください。

スーザン

でも…。私がここでこんなことをしても、彼には届かないし、なにも変わるはずはないわ。

サトル

いいえ。変わるんです。試しにやってみてください。大丈夫ですから。エクササイズだと思って。
それに、ここは地下ですから、誰にも声は聞こえませんよ。
今まで苦しかった思いを吐き出すと思って、叫びながらやってください。

スーザン

（おそるおそる藁人形に近づいて）よくもわがままをぶつけたな～…。（竹刀でパシンと叩く）私の人生を台無しにしたな～…。私の人生を…。最後まで。私を…。
（スーザン、泣き始める。崩れるように座り込み）
こんなひどいことってない。こんなひどいこと…。姉弟なのに、憎みあって…。最後には弟に殺されるなんて…。両親の世話をしても、両親は私には笑ってくれなかった。いつも遠くを見ていた。父も母も、辛そうだった。あの子は私たちみんなを不幸にしたわ。その報いは、誰がくれてやるの？　私ばかり損をしてきた。最後に、やっと父が私に遺産を残してくれたかと思ったら、今度は殺される恐怖におびえるなんて…。こんなの、こんなの、おかしいわ。私はいつになったら、心の底から平安を感じられるの？
（わーん、と大泣きする）

サトル、しばらくそれをしゃがんで見ている。
お屋敷の外の風景、庭の鹿威し、
時間の流れを感じさせる。

サトル、

（かなり泣いて、やっと泣き止んだスーザンに）さあ、あなたの力を取り戻すんです。

竹刀をもって、彼の心の中にいる悪者を殺してください。そして、自分を助けるんです。

スーザン、よろよろと立ち上がり、竹刀を構える。
しっかりと藁人形を見据えて…。

スーザン
死ね！（竹刀を一振りする）
人を恨むやつ、苦しめる奴は死ね！（以下、一言ごとに、竹刀を一振りする）
そんな性格は消えてしまえ！
（だんだんと力がこもり…）
思い通りにならないからと言って、人のせいにする奴なんか、死んでしまえ！
お前のために私が死ぬなんて、あり得ない！
私は生きるんだ！　思い通りにさせるものか！
私がお前から親の愛を奪ったと思うのは間違っている！
お前の態度が悪いから親が怒ったのに、それを私のせいにするのは間違っている！
そんな間違った性格は死ね！
（だんだんと、ハアハアと息が切れている）
私は負けるものか！　絶対に！　心の曲がったものに、殺されてたまるか！
今度こそ、幸せになるんだ！　だから…。

画面、外の風景、時間の流れの表現
（V.O.）
弟の心の中に潜む悪い性格は死ね！
かわいい弟に戻れ！
もう諍いはたくさんだ！！
（ハアハアという息切れの声）

END OF ACT SIX

ACT SEVEN

Int:デービッドとジョナサン、拘置所。テッドが捕まっている。

ジョナサン
テッド、弁護士を連れてきたよ。（デービッド、帽子を少し上げて挨拶をする）

君はここで3日間拘束されたが、これ以上の延長は申請されていないよ。だから、家に帰れるんだ。

テッド、ジョナサンをちらりと見た後、目を落として、無言。拘留所から出る。
ジョナサンが車を運転し、デービッドがテッドと後ろに座る。

ジョナサン
悪く思わないでくれよ。君が「殺す」という宣言をした以上、私は職業柄、警察に通報する義務があるんだよ。こんなことは私も勘弁願いたいよ。

テッド、口を開かない。
デービッド、彼と向き合う。

デービッド
テッド。私は弁護士として長い。だから、ある程度は人の心がわかるんだよ。
あんたは、本当は親の愛情が欲しかっただけなんだよな。
別に遺産が欲しいわけじゃない。いや、もちろんお金は大切だが、親に愛されているという実感をずっと求めていただけなんだよな。それが得られなくて、誰かに怒りをぶつけたいだけなんだろ？

テッド
（下を向いて）
俺のことはほうっておいてくれよ。俺の気持ちなんか、誰にもわからねえ。

デービッド
そうかな？　まあいい。…親父さんの弁護士と会ってきたよ。そして、これをもらってきた。
（デービッド、封筒を差し出す）

テッド、デービットからもらった封筒を開く。中には破かれた小切手があった。ある程度の金額が書かれていた。
宛名にはテッドの名前があった。しみじみとみつめるテッド。

デービッド
親父さんはな、あんたが死ぬ前に帰ってきてくれたら、これを渡そうと思って、用意していたんだと。それを弁護士に渡していた。しかし、あんたは帰ってこなかった。母親が死んだときさえ、かえってなかった。だから、親父さんは、自分がもう見捨てられたと感じて、スーザンだけにお金を残したんだ。もうあんたが自分に関わりたくないのだろうと思ったんだよ。
弁護士はあんたが帰ってこなかったので、約束どおり小切手を破った。あんたは自分が見捨てられ

たと思っていたかもしれないが、そう思っていたのは、お父さんとお母さんのほうなんだよ。

テッド
そんな…。ウソを言え。親父とお袋にはスーザンがいた。

デービッド
息子と娘じゃ、別物だよ。娘がいるから、息子はいらないってわけがないだろう。息子が欲しいから、二人目を産んで、あんたが生まれた。あんたは勘違いをしている。親の気持ちがわかっていない。

テッド
違う。うちは特別だった。なにをやっても、俺だけが怒られた。スーザンはうそをついていつも俺にせいにしていた。そして、親が俺を嫌うように仕向けていたんだよ。

デービッド
それはどうかな？
（一呼吸おいて）
なあ、うそつきの子どもの話をしようか。昔、こんな子どもがいた。
その子は7歳の男の子だ。姉は10歳だ。ある日、プールに泳ぎに行ったとき、姉が彼にバケツで水をかけた。暑かったから気持ちがよかったし、面白くて、お互いに水のかけあいこをした。だけど、男の子がかけた水が、姉にかからずに、そばにいたウェイトレスにかかってしまった。ウェイトレスはびしょぬれ。それで、お母さんは息子を怒った。
そしたら、息子はなんて言ったと思う？

テッド
……（それが自分のことだとうすうすわかってきたので、黙っている）

デービッド
その子は、「僕じゃない！　お姉ちゃんが水をかけようって言ったんだ！」
そしたら、お姉ちゃんがこう言った。「ウソよ！　私、そんなこと言っていない！」
これはどっちがウソを言っているのかな？
ウェイトレスに水をかけたのは、確かに男の子なんだ。
ウソをついて人のせいにしたのは、男の子のほうだった。お姉ちゃんじゃない。
だけど、彼は、本気でお姉ちゃんが悪いと信じ込んだ。お姉ちゃんはうそつきで、僕に罪をなすりつけたってね。子どもは、自分が怒られるのは不当だと思い込んでいるから、こうやって、ひとつひとつの事実を捻じ曲げていくんだよ。

…

…男の子は、自分は無実の罪を押し付けられたと思い込んだ。だから、いつかそれを証明しようと思ったのさ。こうして、人の無実を証明する仕事に就いた。…つまり、弁護士だ。これは、私の子どものころの話さ。おかしいだろう？　自分のウソが本当だと証明したくて、弁護士になっちまったよ。（笑う）

テッド、顔を上げる。自分のことを言われているとばかり思っていたので、意外に感じている。そして、同じ体験を持っていると知って、その思い出にこだわる気持ちがうせてしまった。

テッド

ふうん…。あんたもお姉ちゃんに苦労したんだな。

（ようやく顔を上げて、窓の外を見始めた）

デービッド

違うよ。お姉ちゃんは、僕と遊んでくれていたんだ。僕はそんなお姉ちゃんの愛情に気づいていなかった。子どもが人の愛情に気づけるなんてことは、ないのさ。脳が未熟だからね。誰だって、子どものころに親の愛情や兄弟の愛情に気づくことなんてない。大人になってから、愛を発見するものなんだよ。

テッド

ふうん…。

（おとなしく、窓を見ている）

車は緑の中を走っている。丘のような気持ちの良い場所。

テッド

俺はな…。（窓を向いたまま話し始める）

本当は、親父が思っていた通り、親父に金なんかどうでもよかった。つい二、三年前まではな。親が死んだって、どうでもいいと思っていた。遺産があっても、もらってやるものかとまで思っていたのさ。親父の遺産なんか、わずかなものだし、俺の事業はうまくいっていたんだ。

だけど、二、三年前から事業がうまくいかなくなった。借金がかさんで、どうにもお金が必要で…。引っ越しせざるを得なくなるほど、金に困った。それで親父が死ぬことをあてにしていた。死んだら、遺産が入る。それでなんとかできるって思ったんだ。

そしたら、親父が死んだ。

なんだか怖くなったんだよ。自分が殺したような気がしたんだ。しかし、やっちまった以上は仕方がない。何が何でも、その遺産で会社を立て直そうと思った。ところが…遺産は全部スーザンに…。わかってる。八つ当たりだってことは…。スーザンに悪いことをした。

父親を殺した上に、スーザンまで殺すところだった…。俺はどうかしていた…。

デービッド
心配するな。親父さん、90歳だぜ。りっぱな大往生だよ。

テッド
そうだよな。俺が殺したわけじゃないのにな。

デービッド
そうさ。事業をやり直せ。死んだ気になれば、なんでもできるさ。

END OF ACT SEVEN

ACT EIGHT

スーザン、マダムの家の中にいる。
洋間でマダムと向き合っている。そして、サトルがそばに立ち、テーブルの上においた録音機で、
テッドが「スーザンに悪いことをしたな」という言葉を聞いている。

スーザン
不思議です。この問題がこんなに早く解決するなんて、思いもしませんでした。
本当に不思議です。
マダム、いろいろとお世話になりました。

サトル
（両腕を袖に入れ）言ったでしょう？　あのワークは役に立つと。

スーザン
あの藁人形ですね。あんなことをしたのは初めてだわ。「死ね！」と叫ぶなんて…。
（照れたような笑い）

マダム
今回は、サトルがうまくお手伝いをしたようですね。
でも…、あなたにはまだやっていただくことがあります。
スーザン、最後のワークをやりに行きましょう。

スーザン
は？　最後のワーク？

マダム
こちらへどうぞ。
（スーザンを地下に連れて行く）

地下の暗い部屋。電気をつけないまま、マダムに連れてこられて、スーザンは少しびくびくしている。そして、半円形の部屋に来た時、スーザンは恐怖の声を上げた。
そこに、急にたくさんの人影が現れ、囲まれた気がした。恐怖を感じているスーザン。しかし、よく見ると、それは鏡を何枚か半円形に置いた部屋で、映っているのは自分だった。

スーザン
か、かがみ？
（ハッとしたように、口に手を当てる）

マダム
この世で一番怖いのは、誰だと思いますか？
…自分自身ですよ。

スーザン、マダムを振り返る。

マダム
あなたを殺そうとするものがいるとしたら…それは誰なのでしょうか？

スーザン、険しい顔をして、マダムの言葉の続きを待っている。

マダム
それは、あなた自身なのですよ。

スーザン
（少しおびえて）どういうことですか？

マダム
この世界は、自分の思考が映っている世界なのです。あなたが外側に殺人鬼を見るとしたら、あな

たの心の中に殺人鬼がいるということになります。この鏡に映っているあなたの一人が、殺人鬼だということです。

スーザン
ま、まさか！！
やめてください、脅かさないで。

マダム
心配しなくてもいいですよ。
それは、とても古いものですから。
でも、古いからこそ、エネルギーがたまって、巨大になるのです。
さあ、ここの椅子にお座りください。

マダム、半円形の鏡の中心にある椅子に座るように言う。

スーザン、おそるおそる座る。鏡の自分が全員座る。

マダム
では、目を閉じてください。あなたのまわりに、誰かを殺したい自分がいます。
それは、あなたの心の深いところにずっと隠れて存在していました。
その自分がこれから目の前に出てきます。

スーザン、まぶたをぴくつかせながら、指示に従っている。
そして、何かをイメージしている様子。

場面、変わって、心の中のシーン。
真っ暗ななかから、3歳くらいの子どもの姿が現れる。
とても怖い顔をしている。スーザンの顔がこわばる。

サトル
何か見えましたか？

スーザン
ええ…。そこに子どもの自分がいます。3歳くらいです。
でも、とても怖い顔をしているわ。すごく怖い顔…。

マダム
あなたはその子になにを言いたいですか？

スーザン
どうしてそんな怖い顔をしているの？

マダム
すると、その子はなんと言いますか？

スーザン
アノコヲコロシタイノ
…アノコヲコロシタイノって…
（スーザン、泣き始める）

この子、私です！　確かに私です！
3歳の時の私…。弟が生まれたとき、私は、弟が憎くて憎くて…。
こんな子、いなくなってしまえばいいって、本気で思っていたんです。
今、思い出しました。長い間、もう60年以上も、閉じ込めてきた自分です。
私からお母さんを奪った憎い弟を殺したくて、私はテッドに…。
テッドに…。

マダム
彼に何をしたんですか？

スーザン
赤ちゃんだった彼の鼻をつまんで、窒息死させようとしました。お母さんが見ていないところで。何度かやったけど、もちろん死にませんでした。口も押えないといけないなんて、まだ知らなかったんです。
でも、ある日、弟が本当に死にそうになって…。
私は怖くなったんです。それは、鼻をつまんだのとは関係がなくて、弟が高いところから落ちてケガをしたんですけど、私は、自分が殺そうとしていたから、この子が死にかけたんだと思って、それから鼻をつまむのはやめました。
でも、お母さんに、私がこの子を殺そうとしているのがばれるんじゃないかって、私は長い間、恐ろしい罪悪感の中で生きていました。
いつか、それがばれて、復讐されるような…。弟が怒って私を殺しに来るような…。そんな悪夢を何度か見たことがあります。

マダム
その夢が今回、現実化したということですね。

スーザン
ああ、そうなんだ…。そうだったんだ…。

マダム
藁人形のワークで、あなたはこう言いましたね。
これです。

マダム、録音を聞かせる。スーザンの声で叫んでいる。

スーザン（録音の声）
死ね！
人を恨むやつ、苦しめる奴は死ね！
そんな性格は消えてしまえ！
思い通りにならないからと言って、人のせいにする奴なんか、死んでしまえ！
お前のために私が死ぬなんて、あり得ない！
私は生きるんだ！　思い通りにさせるものか！
私がお前から親の愛を奪ったと思うのは間違っている！
お前の態度が悪いから親が怒ったのに、それを私のせいにするのは間違っている！
そんな間違った性格は死ね！
私は負けるものか！　絶対に！　心の曲がったものに、殺されてたまるか！

スーザン
（目を閉じたまま）これは、…これは！　まるで、赤ちゃんのときのテッドが
私に言っているみたい！
（スーザン、ぞっとする）

スーザン録音の声
…思い通りにならないからと言って、人のせいにする奴なんか、死んでしまえ！
お前のために私が死ぬなんて、あり得ない！
私は生きるんだ！　思い通りにさせるものか！…

スーザン

信じられない…。私は彼に言っているつもりだったのに、これは…。60年前の意地悪な私に、当時のテッドが言っているみたいだわ。もし、彼が赤ちゃんではなくて、
あのとき大人の言葉を話せていたら、きっとこう言っていたわ。

マダム
そうです。鏡を思い出してください。あなたは、外側にいる人を見ているつもりだけど、本当は、自分の内側にあるものに対して、おびえたり憎んだりしているのです。
藁人形のワークでは、弟に対して言いながら、実は自分の中の3歳の自分に言っていたんです。鏡に向かって話した言葉が返ってくるようにね。
あなたはそれを殺すワークをした。だから、この子のエネルギーが減ったので、テッドに投影されていたこの子のエネルギーが消えて、テッドが正気に戻ったんです。

スーザン
そうなの？　…そういうことだったの？

サトル
私たちの周りに見えているのは、他人のように思えて、実は自分の中のたくさんの部分なのです。
あなたがもし、誰かに苦しめられるとしたら、その誰かとは、実は自分の中のもう一人の自分なのです。その自分はとても古い自分で、普段は心の奥に隠れていますが、あなたが眠ったあとでは、心の中でしっかり活動しています。

スーザン
心の奥に隠れているもう一人の自分…？
それが私を苦しめていた？

マダム
そうです。敵をつくっていたのは、あなたの心の中に住むもう一人のあなたなのです。
だから、私たちは自分の世界を、自分でなんとかできるのです。
そのほうが素晴らしいでしょう？

スーザン
で、でも、私はこの3歳の自分をどうしていいかわからないわ。
この子、恐ろしい目をしていて、私にはどうにもできないみたい。

マダム
そんなことはありませんよ。

息を吸い込んで…。どんどん息を吸い込んで…。
あなたは息を吸い込むたびに大きくなります。
そして、この小悪魔のような子が、小さくなります。
そして、巨大なあなたが言いましょう。

（大きなスーザンと、小悪魔のような3歳のスーザンの姿）

マダム(V.O.)
「人を恨むのはやめなさい！
あなたの弟は、あなたからなにかを奪うために生まれたのではなく、あなたと協力して生きていくために生まれたのよ。
この子が生まれたから、お母さんが冷たくなったんじゃない。
あなたがわがままを言ってお母さんを困らせているから、お母さんが怒っているだけよ。
人を恨んで、殺そうとしていると、自分の人生を台無しにするわよ。
だから、あなたの弟を愛しなさい。
あなたの親を独り占めしようとしないで、家族みんなで仲良くしなさい。
そしたら、お前はとても豊かで幸せな人生が送れるのよ」

スーザン
…（涙をぬぐいながら）
マダム、その通りです。どうして私の心がおわかりなの？　私は、親の世話をして結婚をしなかったと言ったけど、本当は、親に執着していたんです。だって、長い間弟に取られていたんだもの。
弟が出て行ったから、やっと親が私のものになると思ったんです。子どものころの、親子3人の暮らしがやっと戻って来ると思ったんです。
だから、母や父が少しでも弟の話をするのが嫌だった。そのたびに、また弟に対する憎しみが出てきて…苦しかった。
このとてつもなく大きな怒りと恨みが、ずっと私を苦しめていて…弟を悪者だと思うように仕向けていました。
ああ、弟の言うとおりですね。私は、親が弟を悪者だと思うように、いつも仕向けていた。
子どものころからです。こんなことに時間を費やしてきた。台無しだわ。私の人生、台無しだった…。
（スーザン、泣く）

マダム
もう終わったんですよ。

もう終わりました。だから、これからは大丈夫です。
これからは、仲の良い姉弟になりますよ。
あなたはもう、自分の幸せを追求していいんです。

スーザン
いいんですか？　私、幸せになってもいいんでしょうか？
こんな、たった3歳で人を殺そうとした私が…。

マダム
もちろんですわ！　もう終わりましたよ。あなたは幸せになる権利があります！
そうなってほしいから、親は子どもを育てるんです。どんなに手間がかかって、どんなにイライラしてもね。

スーザン
そうですね…。ありがとうございます。マダム…。

END OF ACT EIGHT

ACT NINE

マダムの家のプール。ジョナサンとデービッドが、二人でサングラスをして、プールサイドに寝そべっている。執事がバーベキューを用意している。
聞こえているのは、和風の音楽。

ジョナサン
今回は世話になったな、デービッド

デービッド
いや。お安い御用さ。

ジョナサン
…それにしても…

デービッド
ん？

ジョナサン
あんたにお姉さんがいたなんて、初耳だったよ。今どこにいるんだい？

デービッド
私には姉なんかいないよ。弟だけだ。（ニマリとする）

ジョナサン
なっ、（サングラスを外して、体を半分起こしてデービッドを見る）…やられたな。

デービッド
人助けのためなら、ウソも方便ってね。
これもマダムの教えだ。

ジョナサン
うーむ。それは同感だ。（また寝そべる）

デービッド
しかし…

ジョナサン
ん？

デービッド
俺が、「無実を証明したくて、弁護士になった」というのは本当だよ。
スーザンの気持ちはよくわかるよ。
俺だって、弟が生まれたときは、この世界がひっくり返ったように思った。
俺が王様の世界から、突然引きずりおろされた気がしたよ。

ジョナサン
ふうん。そんなものかね？
俺にはわからないな。俺は末っ子だから。

デービッド
カウンセラーは、末子にお似合いの仕事だよ。弁護士は、第一子長男にお似合いだ。
末っ子は指導してもらうのが好きだし、人の気持ちがわかる。

第一子長男は、権威をもって人を支配するのが好きだ。
みんな、なにかしら、自分にぴったりな仕事を選んでいる。
最初の動機は間違っているとしてもね。

ジョナサン
で、どんな無実の罪なんだい？

デービッド
ああ、山ほどあるよ。無実の証明をしたいのは、実は無実じゃないからさ。
スーザンみたいにね。俺のはみ〜んなマダムにしゃべってしまった。

ジョナサン
ふーん。じゃ、マダムに聞くとするか。

デービッド
（上体を起こして、ジョナサンをとがめようとするが、あきらめる）
…ま、マダムにはいつだって、全面降伏だよ。
（と、またデッキチェアに戻り、青空を眺める）

下の階の日本庭園と、その縁側では、マダムが日本舞踊を踊り、サトルが鼓を叩いている。
青い空。

END OF ACT NINE